

令和の源氏物語ブーム

鷹尾 奈津子

きつかけであった。寂聴さんは2003年に徳島で「青少年のための文学講座」を開催されており、私はその受講生だった。そのころは寂聴さんが源氏物語の現代語訳を終えてから4年ほど経ったときで、「源氏物語は日本が誇る文化、外国人が読んでいるのに日本人が読んでいないのはもつたいない」と話されていた。

今年は、年始から毎週日曜の夜が待ち遠しく楽しみでならない。大河ドラマ「光る君へ」の放送が始まり、吉高由里子さん演じるのちの紫式部となる主人公が、賢くて好奇心旺盛で身分が重んじられる一千年前の平安時代を舞台にしても、しきたりや慣習に捉われすぎない生き方の女性として、視聴者（である私）を釘付けにさせてくれるからである。脚本にフィクションはあるけれど、源氏物語執筆へとつながっていく流れはとても面白く、俳優陣の魅力もあり、すっかり紫式部や清少納言などのファンになつた人は私だけではないと思う。

源氏物語に私が最初に触れたのは、寂聴さんの言葉が

その言葉を聞いて、まずは自分にとつて読み始めやすい、源氏物語を漫画にした『あさきゆめみし』（作者 大和和紀）を手に取つた。入口が漫画だつたので他の少女漫画と同様に、恋愛に悩む姿が描かれる内容であることに驚くも、きらびやかな貴族の物語を面白い！と思いつ一気に読んだ。

ただ当時は、その物語が、どのような時代背景のなかで誕生したのかまでは想像に及んでいなかつた。また、身分制度や男女差も大きく、公に活躍する女性が少ない時代に、女性により執筆された物語が語り継がれ、のちに世界中で読み継がれていることの尊さに気付いたのは：恥ずかしくも今になつてである。自分が年齢を重ねるごとに、源氏物語そのものや登場する人物への見方も変化していくと感じている。

寂聴さんが源氏物語の現代語訳本を出版されたときに巻き起こつたという源氏ブームは、当時小学生だった私の記憶には残念ながら残っていない。けれども今年の大河ドラマに端を発する源氏物語ブームは、本屋に並ぶ関連本の多さのみならず、大河ドラマ「光る君へ」の放送終了後のSNS上での盛り上がりで私は体感している。X（旧Twitter）やnoteなどのSNS空間を通じて、見知らぬ者同士で放送回の感想を共感しあつたり、「あの人物のセリフはこういう思いでは？」などと自由に考察しあつたりして盛り上がっている。そのような楽しみは、一千年の時を経てもなお源氏物語が人々の間で話題とな

り、受け入れられてきたことに通じるのでないかと思う。そういう思えるようになつた今こそ、源氏物語の現代語訳者であり、作家であり、結婚も出産も出家もすべて経験された寂聴さんに聞いてみたいことが、たくさん思い浮かぶ。大河ドラマで演じられる紫式部の姿を見ていると、黄色や紫の差し色の着物の装いに好奇心旺盛なその様子が、私が存じ上げる在りし日の寂聴さんのお姿と重なつてみえてくるようなときがある。寂聴さんほどの源氏物語への深い理解者は、果たして今後現れるのだろうか…。